View metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
brought to you by CORE

淑徳大学研究紀要（総合福祉学部・コミュニティ政策学部） 46 135－149, 2012

東京女子高等師範学校保育実習科における昭和初期の幼稚園保姆養成

― 川上須賀子が残した資料から ―

槇　　英　子※

1．はじめに

本研究の発端は、筆者の義母である「川上（旧姓）須賀子」が生前保管していた荷物の中から、東京女子高等師範学校附属女子保育科在学時代のノートが見つかったことである。

義母については、女学校を出てから保育を学び、現在の天皇陛下の保姆に選ばれて宮内庁に勤めていたという経歴を夫から聞いていた。ところが残念なことに、当時の新聞記事[(1)]などの具体的な資料を目にし、東京女子高等師範学校（現在のお茶の水女子大学）の保育実習科に学んだ優秀な卒業生であったことを理解したのは、義母が他界した後であった。その

写真１　川上須賀子に関する新聞記事（左：函館新聞　昭和10年７月29日　右：新聞社名不明）

※総合福祉学部　准教授

新聞記事の中に、義母の母親の談話として「一度は御辞退申し上げましたが、保育部の倉橋主事のたってのお勧めで思いきって拝受しまして…」と記されていたことから、義母が倉橋惣三の薫陶を直接受けた教え子であったことを知り、その頃の話を聞く機会を逸してしまったことをとても残念に思った。

ところが昨年、親族で義母の荷物を整理する過程で、東京女子高等師範学校在学中に記した講義ノートが複数見つかった。戦火を免れて現存していたことにも驚いたが、そのノートの中に、倉橋惣三の講義ノートが３冊含まれていたことには驚嘆した。また、アルバムの中には、現在のお茶の水女子大学附属幼稚園の昭和初期の写真が複数残されていた。そこで、義母「川上須賀子」が残したものは、幼児教育史にとって貴重な資料であり、この存在を公にする必要があるのではないかと考えたのである。

川上須賀子が在籍した昭和９年から10年の東京女子高等師範学校女子保育実習科の様子を知る手がかりとしては、『お茶の水女子大学百年史』(2) がある。そこには、1875年（明治８年）に女子の教員養成を目的として「東京女子師範学校」が設立され、1878年（明治11年）に保姆練習科が附設された創設期から、明治・大正・昭和へと続く女子教育の歴史が詳細に綴られている。「保育実習科」については、第二章に、1886年（明治19年）に成立した高等師範学校女子部が1890年（明治23年）に分立して女子高等師範学校となり、1896年（明治29年）に「保姆練習科」が文部省の許可を得て再設されたが、第三回生で募集を停止し、1906年（明治39年）に改めて「保育実習科」が設置されたと記されている。そして、1898年（明治31年）の保育実習科の学科課程については、その詳細が示されている。ところが、昭和初期の保育実習科の様子についての記述は乏しく、「大正二年から昭和二十三年までは毎年入学者を募集し、その定員は、はじめ約八名、後に約二十名であった。」という記述以外は見られない。そして第五章の附属幼稚園に関する記述の中には、昭和10年に作成・発表された「系統的保育案の実際」が示されているものの、保姆養成に関する記述はない。

昭和初期の保姆養成の実態を知るもう一つの手がかりとしては『幼稚園教育百年史』(3) がある。ただし幼稚園教育史が中心であるため、保姆養成に関する記述は限定的である。昭和初期に関しては、1926年（大正15年）に制定された日本初の幼稚園に関して出された単独の法令である「幼稚園令」によって幼稚園教育制度が整備され、それによって幼稚園の普及や幼稚園職員の地位の確立が進み、保姆育成機関が増加した時期であることが記されている。また、大正末期に14校であった養成機関が1940年（昭和15年）には33校になったとして、当時の養成施設の一覧と学科目表 (4) が示されている。この表は、当時の保姆養成の実態を窺い知ることのできる貴重な資料であるが、科目内容については示されていない。また、資料編には保姆養成の時間割として、「愛珠幼稚園幼児保育法伝習科規則（抄）」（明治19年）(5) と「頌栄幼稚園保姆伝習所規則（抄）」（明治26年）(6) の２つの例が示されているが、昭和初

期の東京女子高等師範学校に関する資料は見られない。

また、保姆養成に関する研究については、明治初期の「鹿児島女子師範学校附属幼稚園保育見習科」に関する研究[7]がある。そこでは、創設期の東京女子師範学校附属幼稚園の保姆であった豊田芙雄が鹿児島女子師範学校附属幼稚園と保育見習科を開設した経緯や保育見習科の授業内容を詳細に検討しており、当時の東京女子師範学校保姆練習科との比較がなされているが、研究対象は明治初期に限定されている。

昭和前期の保育者養成に関する研究では、福岡県の保育保姆養成所についての調査研究[8]が見られるが、福岡県の保育婦養成について検討されたものである。

東京女子高等師範学校を含む戦前の保姆養成制度の成立過程を包括的に論じた研究[9]では、大正時代から終戦までの保姆養成機関は、幼稚園そのものや小学校・中学校の教員養成機関と比べて未整備であったことが指摘されている。養成機関における学科目名については、前掲の文部省調査部資料の1940年（昭和15年）の学科目表[10]が引用されているが、その内容には言及していない。また、戦前の教育内容・教育方法の分析は今後の課題としており、具体的な資料は示されていない。

このように過去の資料や先行研究を検討した結果、昭和初期の保姆養成の教育内容を具体的に検討した研究は見られず、川上須賀子が東京女子高等師範学校保育実習科に学んだ者として残した資料の貴重さが、あらためて浮き彫りになった。

また、関係資料を検討する過程で、川上須賀子の在学期間は、東京女子高等師範学校附属幼稚園にとって「保育研究の黄金時代」[11]と称される時期であったことが明らかになった。この時期以後は徐々に戦時色が強まっていくことを考えても、幼稚園教育研究の充実期に保育実習科に学んだ貴重な記録であるということができる。

本論文では、この資料を検討する初めての研究として、東京女子高等師範学校附属保育実習科の卒業生である川上須賀子が残した記録資料の概要を示し、当時の保育者養成を解明する手がかりを示すことを目的とする。

研究方法としては、まず（１）本資料の歴史的位置づけを行い、次に（２）資料の概観を示し、（３）川上須賀子の保育実習科時代の学習内容の解明に迫りたい。

２．昭和９～10年の東京女子高等師範学校保育実習科の位置づけ

川上須賀子が残した記録資料が幼稚園教育史の中にどのように位置づくのかを明確にするために、東京女子高等師範学校と在籍した時期の保育実習科について述べる。

１）幼稚園教育史における東京女子高等師範学校

幼稚園教育が始まってから135年が経過したが、我が国初の幼稚園は、1876年（明治９年）に開設された東京女子師範学校附属幼稚園である。1871年（明治５年）に公布された学制の

なかでは、「幼稚小学」が幼児の教育機関として規定されたが、この規定に基づいて開設された機関はなく、先例のないなかで、欧米の幼稚園の例に倣って創設された東京女子師範学校附属幼稚園が、幼稚園第一号となったのである。当時の文部省は、この附属幼稚園を模範として日本各地に幼稚園が設置されるのを期待した。

また、幼稚園での保育を担う「保姆」の養成については、幼稚園開設の２年後の1878年（明治11年）に、東京女子師範学校に保姆練習科が設置されたのが始まりである[(12)]。

東京女子師範学校保姆練習科は、９月11日に始まり、翌年９月10日に終わる１年間を修業年限とし、２月20日までとそれ以後の２期に分けていた。入学者は二十歳以上四十歳以下の者とし、入学試験として、論説文の作成や算術などの試験が課せられた。

明治十年代は保姆練習科の卒業生や附属幼稚園の保姆が出向し、実際の保育と併行して各地の幼稚園の設立と保姆養成にあたった。その中には、日本で２番目の保姆養成施設となる鹿児島女子師範学校附属幼稚園保育見習科の設置に尽力した豊田芙雄もいた[(13)]。ここでは、保姆見習生を置き、東京女子師範学校保姆練習科の規則とほぼ同様のフレームで保姆養成が行われ、地方における幼稚園開設と保姆養成の実際的なモデルとなった。

このように、東京女子師範学校は、我が国の幼稚園教育の創成期にきわめて重要な役割を果たした。1908年（明治41年）には東京女子高等師範学校と改称され、1949年（昭和24年）にお茶の水女子大学に包括されるが、その間今日に至るまで、多くの保姆や幼稚園教員を輩出し、幼稚園教育の発展を支えてきた。

２）昭和初期の保育実習科

次に、川上須賀子が在籍していた時代について検討する。

1906年（明治39年）に名称変更をして再開した「保育実習科」は、戦争の激化に伴う附属幼稚園の休園と閉園、再開を経て、1949年（昭和24年）に閉鎖となる。その間の歴史の中で、「倉橋惣三」の存在はきわめて大きいといえるだろう。倉橋は、1911年（明治43年）に東京女子高等師範学校の児童心理学講師となり、1917年（大正６年）には附属幼稚園の主事となった。1919年（大正８年）から1922年（大正11年）の外遊後、再び主事となり、1924年（大正13年）までの２年間と1930年（昭和５年）から1949年（昭和24年）までの19年間を主事として過ごし、長年にわたり保育の実際に携わりながら東京女子高等師範学校教授として教鞭をとっていた。『お茶の水女子大学百年史』には、「大正から昭和初期にかけて附属幼稚園の保育は大きな飛躍を経験した」[(14)] と記されている。昭和初期の保育実習科は、外遊から帰国し、実践と思索を保育理論に結実させた倉橋の影響が大きい時代であったことが推察される。

また、倉橋理論がその後の幼児教育に与えた影響の大きさを考えると、この時期の同校の保姆養成の教育内容はたいへん興味深い。

3）在籍期間中の保育実習科

さらに、川上須賀子が在籍した１年間について検討する。

1934年（昭和９年）４月から翌年３月までの倉橋の「保育法」の講義が、後に『倉橋惣三「保育法」講義録』[15]として出版されている。これは、まさに川上須賀子の在籍期間である。この本の監修者である「菊池ふじの」は、当時すでに家事科を卒業して附属幼稚園の保姆となっていたが、倉橋の幼児教育の講義から学びたいという願いを持ち、実習科の生徒のノートを借りて写し、この講義録を作成した。菊池は、当時、同学内の日本幼稚園協会が発刊していた月刊誌『幼児の教育』にこれを掲載したところ、反響が大きく、発刊に至ったと述べている。また、編者である「土屋とく」は、菊池にノートを貸したのは、卒業後に附属幼稚園に勤めた田村薫（旧姓大岡）であると書いている。「幼児の教育」第34巻第４号には、実習科の入学者の氏名が掲載されているが、川上を含めた24名の中に、「大岡薫」の名前がある[16]。

また、津守真[17]は、本書の中で、この講義をしている最中に、倉橋の代表的な著作である『幼稚園真諦』[18]が出版されていることに注目し、「倉橋が最も充実していた時の講義と言ってよいだろう」と評している。本研究の対象としている資料にも、この時の「保育法」の講義ノートが含まれている。

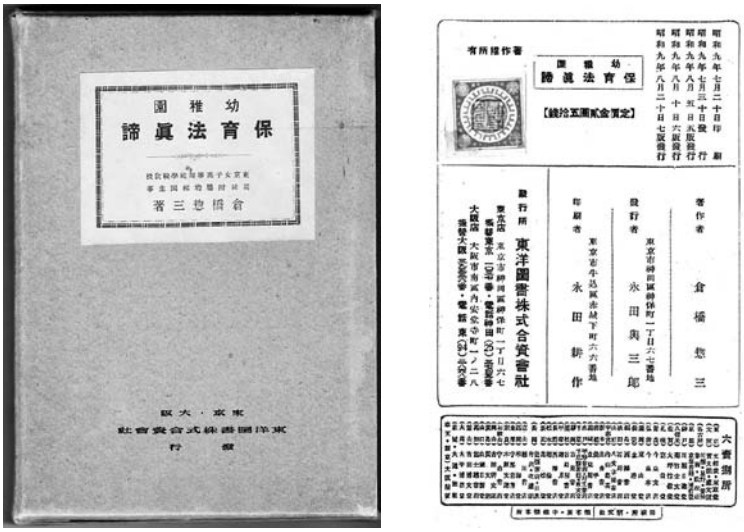

写真２　川上須賀子が所蔵していた「幼稚園保育法真諦」のカバーと奥付

ここで検討する資料が、幼稚園教育史においても重要な時期のものであることがあらためて示された。

３．川上須賀子が残した資料の概要

資料の位置づけを明確にするために、文部省が示した５年後の学科目表と比較し、次にどのような資料が残されているかについて述べる。

１）保姆養成施設の学科目表との比較

まず、1934年（昭和９年）当時の教科目を、1941年（昭和16年）の文部省教育調査部の報告による科目表[19]から類推する。1940年（昭和15年）の保姆養成施設数は全国に33施設であり、官立は、東京と奈良の女子高等師範学校付設のもの、公立は千葉女子師範学校保姆養成科だけで、その他はすべて私立であった。修業年限はほとんどが１年であった。東京女子高等師範学校の1940年（昭和15年）当時の学科目は以下のとおりである[20]。

表１　1940年（昭和15年）の保姆養成施設の学科表目（抜粋）

△は欠科目

学科目表	A										B（A以外の学科目）
	修身	教育	保育	理科	図画	手工	音楽	体操	心理	保健衛生	
東女高師									△	△	
奈良女高									△	△	国語、園芸

残されていた資料は、「修身」「教育Ⅰ」「教育Ⅱ」「保育・児童心理」「保育」「児童心理」の６冊の講義ノートと「手工」「遊戯」の記録である。科目表と比較すると、「理科」がなく、「心理」があり、「体操」については不明である。５年間で若干の変化があったことも考えられる。

２）川上須賀子の講義ノート

ここでは、講義ノートについて検討する。

「修身」は、下田次郎教諭の担当となっている。「生命」「誠」「良心」などについて語られた内容が、書きとられている。

「教育Ⅰ」「教育Ⅱ」は、古川竹二教授の担当となっている。古川教授については、血液型気質相関説を唱えたことで知られている。1927年（昭和２年）発行の『心理学研究』第２巻に「血液型による気質の研究」という論文を発表し、血液型性格判断の知的源流となっている[21]。ここでは、それについての詳細の紹介は行わないが、本講義の記録においても、血液型に関する内容は14ページにわたっている。

ノートからわかった授業内容の構成は、以下のとおりである。

第一章　教育の意義
第二章　教育の始め及び終り
第三章　教育の目的
第四章　教育の結果に影響するいろいろの事情
第五章　教育の身体的方面
第六章　教育の客体
第七章　教授論
第八章　訓育論
第九章　最近の教育問題

七章の途中で「第二学期」、九章の途中で「第三学期」と書かれていることから、３学期制で、年間を通じた授業であったことが推察される。

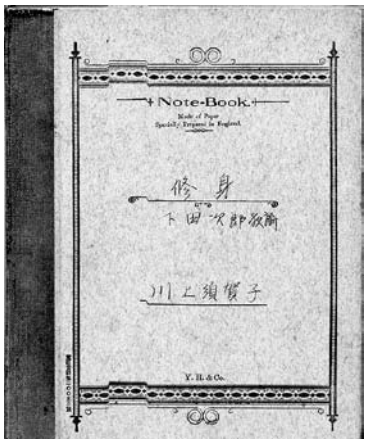

写真３　「修身」の講義ノート

写真４　「教育Ｉ」の講義ノート

「保育・児童心理」は、倉橋惣三教授の担当科目である。前述のように、「保育」の講義ノートは『倉橋惣三「保育法」講義録』[22] として発刊されたものと同様の内容のものである。発刊後、本書の内容に対して、「どうしてこのようなテープ起こしに近いものを講義中に筆記できたのだろう」という感想 [23] が『幼児の教育』に寄せられているが、川上須賀子の筆記も、臨場感があり、詳細にわたるものである。内容は、書籍に準ずるものであるが、若干の相違がある。「保育」のノートは、「保育・児童心理」のノートが「保育」の第４章の途中で書ききれなくなったのを３章から清書し直し、最後まで綴ったものである。

「児童心理」については、１冊目の「保育」のノートの後ろから使用され、横書きで22ペー

ジを使って書かれている。３章の途中で２冊目の新しい「児童心理」だけのノートにうつり、３学期まであった。ノートからわかった授業構成は、以下のとおりである。

第一章　児童研究

第二章　精神発達

第三章　遊戯の心理

第四章　幼児の非現実性

（　　）　社会性

章名は記されていないが、大きな見出しとなっている。

（　　）　児童心理学の結論

ここにも章名はないが、見出しが大きい。

最後のページに四葉のクローバーの押し葉がはさまれていた。

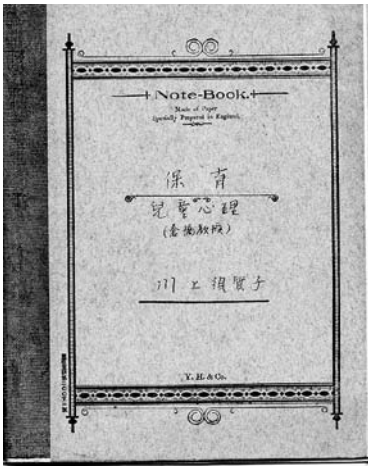

写真５　「保育・児童心理学」の講義ノート

３）川上須賀子の授業資料

講義ノートの他に、いくつかの資料が残されていた。

その一つが「遊戯」の記録である。記録は２部に分かれている。１つの表紙に「村上先生」と書かれているのは、附属幼稚園の「村上露子」であることが推察される。村上は、在籍前年度（昭和８年）の『幼児と教育』に、「子供の自由表現に就て」[24] という一文を寄せている。そこには、子どもの遊戯を従来の大人の不自然な模倣から解放しなくてはという考えが述べられ、実践事例を紹介している。

もう１冊には教員名が記されていない。１学期から３学期まで57種類の遊戯が図入りで解

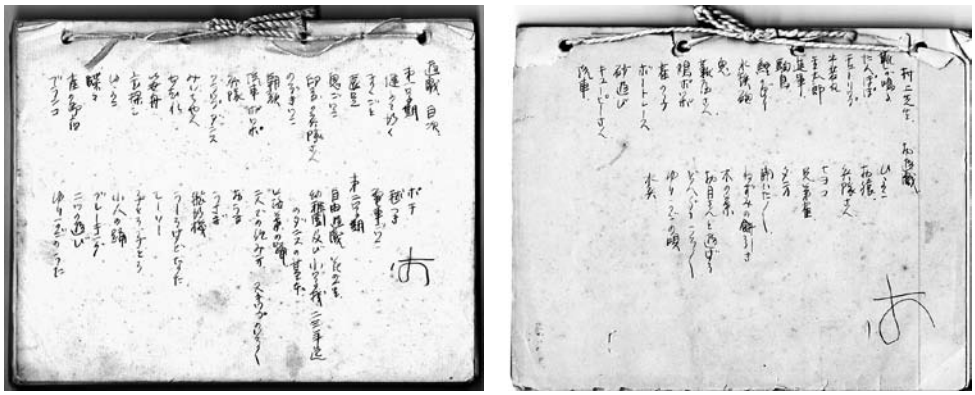

写真６　「遊戯」の目次部分　　右側の資料には「村上先生」と書かれている

説されている。在籍前年度（昭和８年）の『幼児と教育』に、「マメマキ（遊戯）」[25] を土川五郎が紹介しており、それと同じ遊戯がノート内にあることから、当時の遊戯教材を知る貴重な資料である。歌の言葉に応じた動作が丹念に図示されている（写真７参照）。

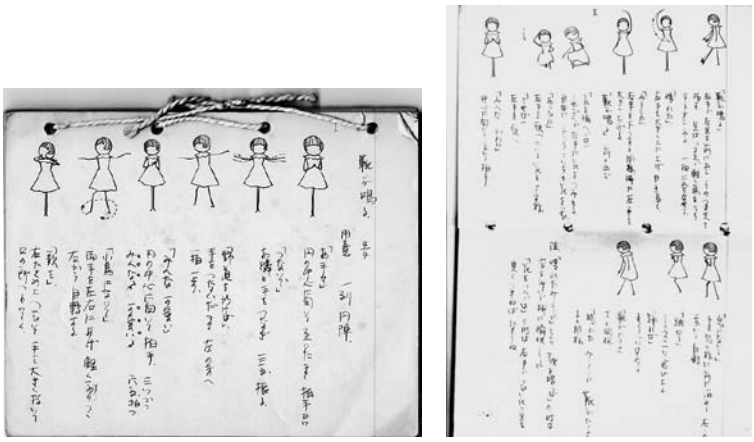

写真７　遊戯「靴が鳴る」の動きの図

「手工」については、木材についての記述や、立体の展開図などが残されている。また、風車用の紙や紙の人形など、いくつかの実物が現存しているが、授業内に制作したかどうかは不明である。木工については、園児が木工をやっていたことは、お茶の水女子大学附属幼稚園創立130周年記念として発刊された『時の標』の写真資料に「昭和10年ごろ　木の動物をつくる子どもたち」[26] があることからわかる。木材の性質を詳細に記録してある。

写真８　風車の用紙（表）　　（裏）

表面は色鉛筆で丁寧に塗られており、裏面には、「風車　色紙でしてもよし。きびがらを柄にする。画用紙、釘でとめ、竹の棒にさす。釘なり何なりにゴムを2つに切って１つを先にはめ、四角をさし、中心にさし、ゴムをはめる。」と書かれている。

４．東京女子高等師範学校保育実習科の保姆養成

資料と文献から、川上須賀子の学生生活の様子を推察し、当時の保姆養成について検討する。

１）保育実習科への入学

川上須賀子は、川上滴三（予備海軍少将）と初枝の長女として1917年（大正６年）２月５日に生まれ、３人の兄がいる末子であった。東京府立第五高等女学校を卒業し、東京女子高等師範学校保育実習科に入学したのは、1934年（昭和９年）の４月21日であった。

入学に際しての記録は残っていないが、当時の入学資格は、1931年（昭和６年）の『幼児の教育』[27] の「雑録」が参考になる。そこには、入学定員は24名で学費は自費で年額55円と記されている。入学資格については、「身体健全品行方正ニシテ保姆タルニ該当スル者タルヘシ」とされ、「師範学校又ハ高等女学校ノ卒業者」を１番にあげている。川上と同期の入学者の出身校は全て高等女学校であり、24名中14名が東京の出身者であった。その他の入学者は、東北、関西、九州など、全国から集まっていた。

また、入学試験については、国語・理科・図画の選抜試験と身体検査と口頭試問があった。具体的な内容は、1930年（昭和５年）の『幼児の教育』[28] の「雑録」から推察することができる。国語は、古文の口語訳と現代文の要約が出題され、作文の題目は「髪」となっている。また、理科は①柿の果実とりんごの果実との違いを説明する②桜の枝をよく観察し、その結果を説明するという課題が出されている。図画についてはみかん２個を鉛筆で写生するという課題であった。昭和９年の試験問題は不明であるが、科目が同じであることから、これに類する出題であったと考えられる。

２）保育実習科での学生生活

東京女子高等師範学校保育実習科の在籍中の記録は、講義ノート類とアルバムの他はほとんど残っていない。講義ノートから３学期制であったことがわかった。

当時の様子は、平成12年に東京女子高等師範学校保育実習科卒業生に対して行ったインタビュー記録 [29] から、推察することができる。

1930年（昭和５年）に入学した「岩崎（旧姓川村）ミチ子」は、「保育実習科はお嬢様学校であった」と述べている。卒業したら保育職につくという使命感をもって入学するところではなかったようである。この頃の実習は、１クラスに４名ずつ入り、１年間に３クラスに入った。校舎が震災後の仮校舎、附属幼稚園も仮園舎の時期であった。

もう一人の調査対象者である「鈴木貞子」は、川上須賀子の同級生で、1934年（昭和９年）に入学している。幼稚園は入学の前年度に新園舎に移転していた。実習は、24人が６クラスに４人ずつ配当され、秋にクラスを変え、２クラスで実習を行った。実習の方法は、現在とは異なり、朝、子どもを受け入れる時から保母と一緒に保育を行い、講義があるときは本校

へ行くという生活であった。そのため、一日の中に子どもと一緒の時間と本校で勉強する時間があったが、生活の中心は幼稚園であった。鈴木貞子は、倉橋理論は難しく、現場ではその通りにいかないと感じ、また理論を聞き、なるほどと思っても実際にはうまくいかないという繰り返しの中でほんとうの意味を理解するようになったと語っている。この頃の保育実習科は、まさに理論と実践を往来しながら、学びを深めることのできる学校生活であったことが理解される。

また、鈴木は不景気で就職難の中、名古屋市立第三幼稚園に就職するが、保育の様子が附属幼稚園と違っていて、ある人数をまとめて行動させるのに苦労し、子どもには申し分けないと思いながら並ばせていた時代と振り返っている。１年間の養成期間であっても、しっかりと保育実習科の保育理論を獲得していたことが推察される。

そして、保母になるために入学したわけではないのに、１年間の保育実習科での学びを経て保母になったことを、幼児期という時期の人間にとっての大切さに心打たれて感激した当然の帰結だったと述べている。

写真９　保育実習科の同期生の写真
（川上須賀子は後列右から３人目）

写真10　昭和９年当時の附属幼稚園の園庭

写真11　附属幼稚園の教職員の写真

写真12　節分の様子

川上須賀子のアルバムには、附属幼稚園の四季の写真が残されている。数多くの子ども達の写真があり、附属幼稚園とのつながりの深さが感じられる。なかには、『幼児の教育』の口絵を飾った写真が数枚含まれている。どのようにして入手したのかは不明である。また、記念写真のなかには大勢で撮った大判のものもある。教職員の写真の中には、倉橋主事の姿もある。

3）昭和初期の保姆養成機関の実態

倉橋惣三は、1938年（昭和13年）の『幼児の教育』に、「保姆養成機関の問題に就て」[30]という一文を載せている。そこでは、保姆養成の一層の充実が求められているなか、保姆養成機関の修業年限は１年という通念は問題であるとし、教育学、心理学、社会事業の理念と実際、幼児保健の一層の充実が必要であり、そのためには時間不足であると指摘している。また、実習についても不十分であるとし、小学校教育と比べて公的な監督が徹底していない状態を問題視している。そして、「幼稚園を充実せしめんとすれば、保姆を充実せしめるを第一とする。保姆を充実せしめんとすれば、その養成機関を充実せしむるを第一とする。」と記し、このことについて熱く語り合うのは、保育にあたっている同志の間であるという文で締めくくっている。倉橋の保姆養成に対する情熱が伝わってくる。

資料の検討から示すことができたのは、昭和初期の保姆養成のごく一部であった。また、養成の期間や制度は充分ではなかった。しかし、川上須賀子の資料と文献から明らかになったのは、幼児教育者として育つための充実した学びが東京女子高等師範学校保育実習科にはあったという事実である。そして、それが養成にあたった人々の熱意に支えられていたことを理解することができた。

5．おわりに

現在、幼稚園と保育所の一体化政策が推進され、幼稚園教育の歴史は、大きな転換期を迎えている。2011年７月、政府は「子ども・子育て新システム」の中間報告において、幼稚園は当面残存するが、いずれはこども園に政策誘導するという方向性を示した。こうした動きは、子育て支援策としては期待されるが、質の高い学校教育と保育を一体的に提供するためには、今後一層の議論が必要であろう。

これまで、幼稚園教育の保育内容や方法は、保育時間外の協議や環境構成に支えられてきた側面がある。幼稚園という名称の施設が確実に減少していくなかで、幼稚園教育の成果と課題を検討し、その成果については、新たな制度や施設に引き継ぐ努力をすべきであろう。援助の対象が広がっても、保育者が幼児の教育の専門家であることに変わりはない。幼児教育者としての専門性の確立に焦点を当ててきた幼稚園教育から示唆を得ることは、幼児教育の転換期における保育研究の重要な課題の一つなのではないだろうか。

津守[31]は、「1930年代の幼児教育は、幼稚園や学校の中で良いカリキュラムを用意することによって、家庭だけではえられない特別に良い教育をすることが使命だと考えた」と述べている。そして、就学前の保育施設が多様化する現代にこそ、幼児期に人間的経験がなされることが求められており、倉橋の説く保育法の真諦は必要とされ、幼稚園が独占するものではないと論じている。倉橋理論に代表される1930年代の東京女子高等師範学校の幼稚園教育と幼稚園保姆の養成についての検討は、それを鏡として現在をふり返り、今後の幼児教育を考える手がかりになるのではないだろうか。

本論文では、資料の具体的な内容については概要にとどめた。今後さらに詳しく、保姆養成の内容と方法について検討したい。

注

（１）函館新聞の他、７社の記事の切り抜きが残っているが、他社の名称は不明である。地方紙でも大きく扱われていたことからも、当時は大きなニュースであったことが推察される。
（２）「お茶の水女子大学百年史」刊行委員会編（1984）『お茶の水女子大学百年史』 http//hdl.handle.net./10083 /4563
（３）文部省（1979）『幼稚園教育百年史』　ひかりのくに
（４）同上書　.265（文部省教育調査部資料第七集「幼児保育に関する諸問題」昭和17年からの引用。）
（５）前掲書（3）.919
（６）前掲書（3）.939
（７）清水陽子（2008）豊田芙雄と鹿児島女子師範学校附属幼稚園保育見習科に関する一考察　乳幼児教育学研究　17.　9-38
（８）平田宗史（2005）福岡県幼児保育史研究（Ⅳ）－昭和前期の保育所と保育者養成－　九州女子大学紀要　42－1.　1-11
（９）大岡紀里子（2009）近代日本における幼稚園制度と保姆養成制度の成立過程　早稲田大学大学院教育学研究科紀要　別冊　17-1.　181-189
（10）前掲書（4）
（11）前掲書（3）.803
（12）前掲書（3）.80
（13）前掲書（7）
（14）前掲書（2）.796
（15）菊池ふじの監修　土屋とく編（1990）『倉橋惣三「保育法」講義録』フレーベル館
（16）読者からの投稿のページの最後に、４月からの入学者氏名と出身学校名が記載されている 1943『幼児の教育』第34巻４号　.74　http://hdl.handle.net/10083/27392
（17）前掲書（15）津守真「いまなぜ倉橋惣三か」　.11
（18）昭和９年版の正式な書名は『幼稚園真諦』ではない。倉橋惣三（1934）『幼稚園保育法真諦』東洋図書　蔵書は同年の発刊であるが７版である。
（19）前掲書（3）.265
（20）前掲書（4）33施設の学科表目から抜粋して作成。参考のために奈良女子高等師範学校も記載。他の施設のＢの科目には、他に、宗教教育、社会事業、談話、栄養、美術、文学、再訪、舞踊、看護学、歴史、数学、割烹、英語、育児法などがあり、各施設によって、かなり異なった教育がなされていた。
（21）渡邊芳之・サトウタツヤ・坂元章：企画シンポジウム（2008）古川竹二：血液型気質相関説の光と影－東京女子高等師範学校・教育心理学・性格理論の歴史的検討－日本パーソナル心理学会大会発表論文集，17.　18-19

（22）前掲書（15）
（23）浜口順子（1990）倉橋惣三「保育法」講義録を読んで 幼児の生活原理について『幼児の教育』第89号第１号．30-37　日本幼稚園協会
http://hdl.handle.net/10083/44801
（24）村上露子（1933）子供の自由表現に就て『幼児の教育』第33巻第11号．59-61　日本幼稚園協会　http://hdl.handle.net/10083/27289
（25）土川五郎（1933）マメマキ（遊戯）『幼児の教育』第33巻第１号．58-61　日本幼稚園協会
http://hdl.handle.net/10083/27076
（26）国立大学法人お茶の水女子大学附属幼稚園（2006）『時の標』.108　フレーベル館
（27）東京女子高等師範學校保育實習科生徒募集（1931）『幼児の教育』第31巻第２号．73-77　日本幼稚園協会　http://hdl.handle.net/10083/26590
（28）東京女子高等師範學校保育實習科入學試驗問題（1930）『幼児の教育』第30巻第５号．87-90　日本幼稚園協会　http://hdl.handle.net/10083/26398
（29）中島寿子（2001）愛知県における倉橋惣三の教え子たちの保育実践　愛知教育大学研究報告，50（教育科学編）．23-33
（30）倉橋惣三（1938）保姆養成機關の問題に就て（保姆養成所の問題）『幼児の教育』第38巻第４号．32-35　日本幼稚園協会　http://hdl.handle.net/10083/28338
（31）前掲書（17）.23

Training Courses for Kindergarten Teachers at Tokyo Women's Normal School in the Early Years of the Showa Era:

from Notes of Lectures by Kawakami Sugako

MAKI, Hideko

The purpose of this paper is to present the materials such as notes of lectures which was made by Kawakami Sugako who had graduated Tokyo Women's Normal School as records which clarify training methods of Kindergarten teachers at that time.

From the comparison with studies done ahead, there is no study that clarifies the training course of early years of Showa era from the real materials which were made by a student at that time. So the Sugako's materials are valuable.

The materials remains now are lecture notes of "Shushin", "Kyouiku", "Hoiku" and "Zidoushinri", and records of "Shukou" and "Yugi".

The further subject is a deep examination of these materials.